

---

# 憎悪するヒト

茶柱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

憎悪するヒト

### 【著者名】

茶柱

N22871

### 【あらすじ】

頭脳明晰、運動神経抜群の鈴木。ある日、小さなことで、イジ  
メに遭ってしまう。イジメは日に日に酷くなり自殺まで追い込ん  
でしまった。彼を自殺まで追い込んだのは、なんなのか？ 彼の  
日記には一体何が書いてあつたのか？ 嫉妬心が生んだ悲劇を描い  
た作品。

## プロローグ

今週、市立第二中学校で男子生徒が校庭で血を流しているのを下校していた生徒が偶然発見しました。直ちに救急車で搬送されましたが、搬送当時から息はなく、搬送先の病院で死亡が確認されました。司法解剖の結果、高いところから落下し地面に強く叩きつけられた脳内出血などが死亡の主な原因としています。警察は他殺の可能性は高いと見て慎重に捜査を進めています。また、男子生徒は近年、酷いイジメなどに遭っていたという情報もあり、飛び降り自殺なども視野にいれ捜査を進めている模様です。以上、県内のニュースでした。次は天気予報です。

『昨日のニュース見た？ 鈴木さん家の子供が、飛び降り自殺ですって』  
『噂では、酷いイジメにあつていたんだそうよ』  
『そうそう。で、犯人はクラスメイトだつたらしいわよ』  
『可哀想に。あんな良い子だつたのに』  
『最近はそういう子に限つてイジメにあうのかしら』  
『今の世の中、何がおきるか分からぬないですものねえ』  
『ほんと物騒な世の中になりましたからねえ』

クラスメイトが一人死んだ。

しかし俺は、とても清々しい気分だ。

自殺なのか他殺なのかなど、正直関係ない。  
死んだ。その事実だけが純粹に嬉しい。

そうだ。これは天罰だ。

神が天罰を下したんだ。

ようやく不公平な世にだという事実と向き合ったか神よ。

俺は奮う気持ちを心の片隅において、今はただ、偽りの涙を流すことにだけ考えていた。

## プロローグ（後書き）

初めまして茶柱です。評価おねがいします。感想も受け付けています。

中学の入学式で逢つた時から彼女から目が離れないでいる。それは初恋だつた。

「福田君。おはよう」

「こいつだ。」

「こいつのせいで俺の初恋は終わつたんだ。」

「おはよう」

返事には、いつも少し間をおいて機嫌が悪いかのように接している。

彼の名は鈴木。頭脳明晰で性格は温厚。運動神経もよく、テニス部に所属している。春には一年生ながら団体で出場し県大会準優勝という好成績を残した。そんな中学生の？模範？的存在の彼だが凄いのはそれだけではない。小さい頃からエレクトーンやバイオリンといった特殊な技能も研磨している。

そんな彼を女子が黙つていいわけがない。

こいつの虜になつた女子は数え切れないほど存在する。

俺の初恋相手もその一人だ。

そんな彼を俺は憎んでいた。

確かに彼は、能力を身に付けるためならば努力を惜しまない。

しかし、彼が生まれつき兼ね備えている能力、条件、立場、全てにおいて平民を超越している。

？そもそも不条理な世界なんだ？

そつと、心の中で囁いた。

一時間目は音楽だ。

音楽は第一音楽室のため、新校舎に移動する。

勿論、俺は一人で。

別にイジメに遭っているわけでもない。

俺から拒絶しているのだ。

入学当初は俺に声をかけてきた奴もいたが、適当に相槌を打つ日々。そのうち俺に近づく者はいなくなつた。

俺の前には女子が群れをなしている。

その中心には、あの鈴木がいた。

相変わらず人気者だ。

音楽室に行つても、これといってやる事はない。

寝ているふりをしている。

毎日が、そんな日々だ。

しかし俺みたいな人格を持つていると大抵、イジメに遭う。

俺も過去に一度、イジメ常習犯の佐藤と外村にイジメられた。

シャープペンシルの芯を全て折られていたり、教科書の1ページを切り捨てられていたり。

幼稚なことに苛立ちを隠せなかつた俺は、佐藤の筆箱をトイレに流してやつた。

佐藤は憤怒した。一日中『誰だ!』と叫んでいた。

それが快感だった。

しかし、それ以来、イジメの対象は俺ではなくなつた。

勿論、嬉しい。が、あの快感を得られないとなると悲しい部分も少しある。

気付けば、鈴木がピアノを弾いている。

女子の歓声が耳障りだ。

その中には俺の初恋の相手もいた。

俺は小学校一年生からピアノを習つている。今でもたまに顔を出す。  
経験や実力からしても俺が上を行く。

だが、評価されない。

俺は、この劣等感を抑えられず、今にも罵声を上げそうだ。  
思えば、佐藤や外村などからも、鈴木を批判する会話が聞こえてくる。

音楽の先生がドアを開けた。

ピアノの周りに集まっていた生徒は、足早に席に着いた。

そして福田にとつて憂鬱な一日が、また始まつた

**嫉妬（後書き）**

いつも。茶柱です。一度目の投稿となりました。評価よろしくおねがいします。感想も気軽に書いてくださいな。

彼は、お昼休みなどにも女子を引き連れ、音楽室でピアノの腕を披露していた。

俺は、外から聞こえるピアノの音色を聞きながら、本を読んでいた。彼の音色は認めたくはないが、確かに美しい。だが、まだまだ。ミスター・チや強弱の付け方などない、まだ俺のほうが上だ。

しかし、彼はピアノだけではない。そう思つてしまつと、自分の中の自分が堕落していく。自分の良い所を必死に考える自分が。

### 『キーンコーンカーンコーン』

昼休みが終わった。

これから五時間目の授業が始まる。

この五時間目が終われば、今日、が終わる。家に帰つても大してやることはない。時が経てば、また、明日、がやって来る。なのに、やけに気持ちが高揚する。

「福田君。芯、貸してくれないか」鈴木が俺のほうを向いて催促してきた。なぜ、俺なんだ。

お前の好きな女子からればいいだろ。

「だめか?」

ここまで強要されたら貸さない奴はいないだろ。と、思いながらも無言でシャープペンシルの芯を一本手渡した。

鈴木は申し訳なさそうな顔をして「ありがとう」と言つて大切そうに受け取つた。

そう考えると良い奴なのかもしれない。  
人間として、大切な礼儀がちゃんと身に付いているし、性格も良い。  
彼を嫌う者はいないだろうと思えてしまつほどだ。  
ただ、自分の技術を見せびらかしていることだけが余計なのだ。  
いや、これは自分が妬んでいるだけなのかもしれない。  
常に苛立つてゐるこの時期に、そのよつは言葉は通じなかつた

### 『キーンゴーンカーンゴーン』

下校の時間だ。

俺は部活に所属していないため、いつも足早に学校を後にする。しかし、この日は委員の仕事で掲示板の張替えをしていた。音楽のポスターを張替えに行くため音楽室に行くことになった。音楽室に近づいたと同時に、反射的に体が硬直した。

人の声がする。

『…………え…………な…………でし…………』

よく聞こえない。

足音を立てないように恐る恐るドアに踏み寄つた。

『私と付き合つてくださいー!』

驚いた。

その声の主は、俺の初恋相手だった。

相手は誰なんだ。

『僕には他に好きな人がいるんだ。君の気持ちは嬉しいが君とは付き合えない。』

鈴木だった。

状況が理解できない。

なぜか体が小刻みに震えだした。

俺があんなにも想っていた人がこんなにも容易く、フラれてしまつたのだから。

彼女は、泣きながら音楽室を背に走つていった。

鈴木は彼女を追おうとはせずに、音楽室の中央で、うつむいている。

俺は、驚愕の事実に目を向ける」とは出来ず、足早に音楽室を後にしてしまつた。

次の日。

俺は疲労で言つことを聞かない体を無理矢理動かし、登校した。

教室に入つたなり違和感を感じた。

俺の、前の席の鈴木の机が見当たらない。

なぜか、グランドのほうに目がいった。

グランドの中心には、

彼の席にあるはずの机が、

ボツンと投げ捨ててあつた。

## 報復（後書き）

展開がなくて面白くないですね。次回は急展開を加えて行きたいと思ひます。評価、感想どんどんしゃってください。

彼の机が、グランandiseの中央に佇んでいた。

そういえば。

昨日、彼がピアノの腕を披露しているときの情景が頭をよぎる。イジメ常習犯の佐藤と外村がやけに批難している情景だ。もしかしたら、そのせいかも知れない。

? だつたらどうする。お前は何を思つ?

そうだ。

俺は傍観者だ。

ここでアクションを起こそうが未来の予定調和には逆らえない。

足音が聞こえた。

その音の主は鈴木だつた。

彼は教室に入つてくるなり慌てふためいた。

机がないことに気付いたようだ。

いつも笑顔の鈴木の顔は焦りを隠せないでいる。

彼は、荷物を無造作に投げ捨て、周りを必死に見渡している。グランドの中央に佇んでいため、すぐに見つけられたようだ。

彼は、一息つき、誰もいない廊下に消えていった。

何故か腹立たしい。

彼は憤怒することを知らず、むしろ安堵しているように見えた。

それが、悔しかつた。

しばらくすると彼は、机を抱えてやつてきた。  
机を置いて、イスに座つた。

「おはよ」

彼の僕への第一声は、挨拶だった。

「お、おはよう」

戸惑つてしまつた。

「僕つて、嫌われるのかな」「いきなりの質問に驚かされた。

十秒間、静寂に包まれる。

「そつそんなことはないと思つ」

何を言つてゐるんだ俺は、怨んでいたはずなのに。

「そつか」

それっきり、彼は日常に溶け込んだ。

今日は、やけに賑やかだ。

クラス内が活氣であふれている。  
いや、考えすぎか。

朝の出来事以来、聞こえるもの全てに過敏になつていて。  
そんな気がした。

また? 今日? が終わる。

憂鬱な一日が。

帰ろうとした。

鈴木がいた。

いつもの風景だ。

しかし、珍しく周りに追っかけがない。  
隣には女性がいた。  
手をつないでいる。

『音楽室で告白したらしいよ』

『え？ ダメって言われたんじやないの？』

『それがね、鈴木君が今日、告白したんだって』

『もう手がないでるよ』

『ちょっとありえないよね』

女子の話が勝手に耳に入ってきた。

音楽室、告白、鈴木。

あの情景が蘇つてきた。

そう。

俺の初恋相手が告白している情景が。

彼と彼女は笑っていた。

お互い手を握り締めて。

帰宅した。

俺は泣いていた。

いつの間にか暗くなっていた。

朝は来るつて誰かが言っていた。

夜は長いな。

## 謬見（後書き）

まずははじめに、すみませんでした。平日は一日に一回のペースにしたいと思います。はい。評価おねがいします。感想や指摘もバンバン受け付けています。

## 濡衣

嘘だろ。

夢なんだろ。

ここはどこだ。

俺は誰なんだ。

『P.i.p.i.p.i P.i.p.i.p.i . . .』

「うわっ

ここはどこだ。

家だった。

目覚まし時計がなつていた。

なんだ。夢か。

それにしても最近、朝は体が妙に重い。

疲労が俺を押しつぶしているような重さだった。

何とか登校できた。

なかなか起きれなかつたために、いつもより十分ほど遅れた。

十分遅れても登校してるのは、見た限り俺しかいない。

誰もいない廊下を経由し、俺のクラスへたどり着いた。

鈴木がいた。

妬ましいほど幸せな鈴木が。

彼は、なにか作業をしていた。

俺は席に着いた。

一応、疑問を投げかけてみる。

「なにかあつたの。」

心無い声で。

「ただの悪戯さ。」

鈴木の机には、『死ね』『殺す』『クソ』などが油性ペンらしきもので書いてあって、悪戯のレベルではない光景だった。

一瞬、俺は彼を心配した。

だが、昨日の帰り道の場景が浮かんだ途端すぐに嬉しさが込み上げてきた。

この流れなら、昨日は佐藤、外村。

今日は、鈴木が付き合つたことを妬んだ女子ってところか。

だが、今までの佐藤と外村とはレベルが違つた。

一日田は机をグランドに投げ捨ててあった。

一日田は机に油性ペンで落書き。

そして田代ひが変わった

今日は鈴木が、いじめられてから三日目。

今日は一番に来た。

教室に入った瞬間、悟つた。  
黒板にデカデカと書いてある。

? 女タラシの鈴木?

? 男の友達がいない鈴木?

? 家で泣いてる鈴木?

予想はついていた。  
驚きはしない。

肝心の鈴木は、まだ登校してこない。

また一人。また一人。  
登校してくる。

が、誰もが黒板の文字を見て見ぬふりをする。

そんな中、鈴木と付き合つている俺の初恋相手が登校した。  
黒板を見るなり、一瞬硬直したが、黒板消しを持って消そうとした。

「みんな、おはよう~」

その時。

神様は悪戯をした。

担任の入沢先生が教室に入ってきたのだ。

入沢は驚いていた。

入沢は無言のまま、すぐに彼女を席に座らせようとする。彼女は何とか消そうとするが、入沢の説得で思いどおり、涙目になりながらも着席した。

朝の騒音が嘘のようになくなる。

この静寂を打ち破ったのは入沢だった。

「これ、やつたの誰だ？」

自己申告する者はおろか、口を開ける者さえいない。

「もう一度聞く。これやつたの誰だ？」

誰も口を開かない。

「この出来事については他クラスに他言するなよ。では、朝学活をはじめる。」

その時、鈴木が入ってきた。

「すいません。遅れました」

「はやく席につけ」

「はい」

クラス内は不穏な空気に包まれていた。

だが、何もなかつたかのように日常に溶け込んでいく。

これで、また普遍の無い、憂鬱な一日が始まる。はずだった。

それは、昼休み。

『生徒の呼び出しを致します。1年1組の…』

佐藤、外村あたりだろうな。もしくは女子。

『福田君。一年一組の福田君。今すぐ、生徒指導室にきなさい』

呼び出されたのは、確かに俺だった。

どうせ事情聴取かなにかだろう。

そう思いながら生徒指導室へ向かった。

ガラガラガラ . . .

「失礼します。」

「来たか。まあ座れ。」

俺は席に着いた。

5秒の静寂。

疑問を投げかけた。

「僕になにか用ですか。」

「それなんだが。」

「おまえなのか？ 黒板に鈴木の悪口書いたのは」

この質問には度肝を抜かれた。

## 濡衣（後書き）

評価と感想をお願いします。特に評価の方をほんとにお願いします。

す

## 疑心

『おまえなのか？ 黒板に鈴木の悪口書いたのは』

入沢が言つた相手は、間違えなく俺だった。

俺が犯人？

笑いが込み上げてくる。

馬鹿か。

この人は。

「すいません。意味が分かりません」

「そのままの意味だ。福田。おまえなのか？」

何を根拠に俺が犯人だと？

「僕はやってないです」

正直に言つた。

真実を言つた。

「黒板の字を見たが、どう考へても福田の字にしか見えないんだ」

偽装しただけだろ。

瞬時に思つた。

「いや、誰かが僕を犯人に仕立て上げたいだけでしょ」

「そ、 そうだよな。 お前を疑つて悪かったな。 教室帰つていいぞ」

用件はそれだけか。

落胆した。

俺の担任は、 こんなにも馬鹿だったとはな。

「失礼しました」

機嫌が悪いような口調で言つてみた。

帰宅中に考えた。

どうやつたら犯人が見つかるのか。

このままでは俺は永遠に悪役だ。

? 考える… ?

指紋…。

だめだ。

鈴木がいじめられそうだなんて言つて警察が動くはずない。

カメラを仕込むか…。

だめだ。

下手をしたら没収だ。

俺は答えを得られないまま、 帰宅し、 そのまま眠りについた。

次の日は暑い日だった。

教室に入った。

いじめの内容は、今日も黒板への悪戯書きだった。

俺は一番に来た。

鈴木は二番目に来た。

今回は、鈴木は遅れてくれなかつた。

彼は冷静に、黒板消しで悪戯書きを綺麗に消して何事もなかつたかのように席に着いた。

彼は俺を見ていた。

「最近、このクラスに僕の居場所がないよ

「俺だつてそうさ」

これは本音だつた。

なぜか出てしまつた本音。

「そつか。でも、最近は福田君が話し相手になつてくれてるから楽しいよ。学校が

嘘だろ。

お前は所詮、女だろ。

「そう。」

いつして鈴木との会話が途切れた。

昼休み。昨日のような放送が鳴り響いた。

『生徒の呼び出しを致します。一年一組の鈴木君。一年一組の鈴木君。いますぐ生徒指導室へ来なさい。』

呼び出されたのは、俺ではなく鈴木だつた。

## 疑心（後書き）

突然ですが、評価お願いします www

## 凶荒

鈴木が呼び出された。  
俺ではなく。

何故か落ち着かない。  
なんでだ?  
きっと俺への疑いが晴れたんだろう。  
自分で自分を納得させる。

『キンコーンカーンコーン』

昼休みが終わった。

鈴木は帰つてこない。

国語の授業が始まった。

俺の前の席には相変わらず彼はいません。

その日、結局、鈴木は帰つてこなかつた。

その夜、俺は眠れなかつた。

特に何を考えてるわけでもなく、なにかをしているわけでもない。  
ただ、時間の流れを感じていた。

いつの間にか、日が昇つっていた。

たまたま新聞を見た。

- 『海水浴で事故3人死亡。1人が未だ行方不明』
- 『G怒涛の5連勝!』
- 『不景気を乗り切るエコな生活の仕方。』
- 『ハイブリットカー トヨタのプリウス登場』

普段、耳にする内容ばかりだ。

だが、次の記事を見た瞬間、目が丸くなつた。

- 『市第一中学校で少年転落死。自殺か』

その学校名は明らかに俺の学校のものだつた。

凶荒（後書き）

評価おねがいします  
w

## 自決

唚然とした。

一体誰が死んだんだ？

何があつたんだ。

とりあえず学校に行こう。

俺はいつもより、足早に自宅を後にした。

登校し、教室に入った。

誰もいない。

刻々と時間は過ぎてゆく。

また一人また一人、登校してくる生徒が見える。

しかし、その中に鈴木の姿は一向に見えない。

その時だった。

『連絡をします。今日、緊急朝会があります。筆記用具を持って体育館に速やかに移動しなさい。繰り返します…』

きっと、自殺した奴の話か。

俺は誰よりも早く体育館へ向かった。

みづやく、全校生徒が着席したよつだ。

『これから、緊急朝会を始めます。』

校長がステージに上がつて挨拶をした。

『新聞等で知つてゐる生徒もいるかもしませんが、昨日、1年1組の鈴木君が亡くなりました。』

え…？

鈴木が？

『皆さんは、これからアンケートをしてもらいます。』

先頭からアンケート用紙が回つてくる。

内容は実に簡単なものだった。

？鈴木君の悩んでいたことなどを知つてることを書いてください？

勿論何も書くわけがない。

白紙のまま提出した。

最初は少し悲しんだ。

しかし、まるでもう一人の自分がいるかのように、喜びが湧き上が

つた。

教室では、半分以上の人気が泣いていた。

その中で俺は一人嘆泣をしていた。

一年一組だけは今日一日休みになるらしい。

担任、入沢の長話も終わり、帰宅しようとした。

「福田、ちょっと来い」

呼び止められた。

そして、生徒指導室へ。

「これ、見てくれ」

それは、監視カメラの映像のよつたものだった。

あまり画質はよくないが、

夜の学校だ。

日付は昨日の深夜。

次の瞬間、深夜にいる不審者のような生徒がカメラに近づいてきた。

見覚えのある顔だった。

その顔は、俺だった。

## 明白

田を廻りながら。

ただ、カメラの前を通り過ぎていった。

なぜ俺がここに？

「これ、お前だよな福田」

「は、はー…」

「なぜこんなことを？」

まるで記憶にない。

「なにかしたんですか…？」

「決まってるだろ。いじめだ。」

え。

「僕はやつてません。」

「こんな証拠があるんだぞ。まだ吐かないつもりか。」

本当に記憶にない。  
ところよつ、やってない。

少し、沈黙が続くと、

「吐いた方が楽になるべ。」

「わつわつ | 押し。

「本当に僕はやつてないんです。」

「やつぱつわづか…」

「お前はそんなことやつむけむ細えなに。」

「やつぱつ。とは句を表してこらのあひつか。

やつですか。

「「」の映像を見てくれ。」

その映像は、やつも見た映像だ。

「お前、田を瞑つてるだろ。おかしこと想つて、インターネットで調べてみたんだ。「」に行つてみる」

と、手渡されたのは、隣の県の病院の名前だった。

「え、あ、はー。」

「夢遊病かもしけない。と書つておな。」

後日、病院に行ってみた。  
精神科だ。

初老の男性が診察した。

診察では異常なし。

次は、アンケートだ。

書き終わった。

「起床時にかなりの疲労があるんだね。いつ頃からかな?」

「中学に入つてからです。」

「それが原因かもしねえ。」

「どういふ意味ですか?」

「君は睡眠時遊行症の可能性がある。」

「よく分からぬのですが」

「世間では夢遊病といわれている病気だよ。」

「夜に無意識に行動するつて奴ですか?」

「そうだよ。」

「何が原因なんですか?」

「ストレスだね。思春期には時々、あるんだよ。」

俺が鈴木をいじめていた…。

心に突き刺さった。

先生には薬を処方してもらつた。

帰り道、考えた。

俺が殺した。

そうだったのか。

思い返せば、俺は決していい人生ではなかつた。

それを理由にして、全て鈴木に当たつていた。

いじめて。

翌日、警察署に呼ばれた。

「鈴木君の家から日記が出てきたよ。」

「…。」

「最後のページ読むよ。今日、福田君が僕をいじめていたという事実を知った。とだけ書いてあつたよ。前のページにも君を良いよつに書いてあるからきっと、親しい友達だと思っていたんだと思うよ。裏切られた事実を知って、勢いで自殺してしまったんだと思うよ。」

「…。」

「君は鈴木君の命を償わなくてはいけない。そうだろう?」

「…。」

「福田君? 福田君?」

今日、私は知りました。

事実を。

鈴木。

いま、

僕も、

逝くよ。

君の元へ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2287i/>

---

憎悪するヒト

2010年10月19日19時30分発行